

なかよしひまじんジャーナル

# ひまじん

きみは  
バラより  
とげが  
ある?  
の号



2011年  
7月

No, 104

4/07



# プロジェクト：テウ

「僕は強くなりたいです」

とテウさんは力強く言った。

背は僕と同じくらいだが痩せていて、頭髪が少しうすくなりかけている。

「そうだなあ、強くなりたかったらKさんみたいにジムに通ってバーベルを上げ下げして、腕立てや腹筋運動をしてどんどんきたえた方がいいですよ」

と実演つきで返すとひどく妙な顔をした。

「違います。僕はつよくなりたいです」

「だから強くなりたいたいんだったら日本語の勉強なんかしないでボクシングか空手でも習った方が・・・」

「僕はベトナムに帰ったらつよくなりたいです」

ここまでしゃべってようやく彼の言う「つよく」が「通訳」の意味らしいという事に気がついた。

「日本語の勉強をしたがっているベトナム人がいる」

という話をT氏が持ちかけてきたのは今年の年末のことであった。

年齢はおおよそ30歳、独身の男性で市の下水処理施設の管理を請け負っている会社の仕事をしているのだという。

来日からおおよそ三年、養父市に来てから半年近くがたつ。

さっそく出会ってみるとなかなかの好青年で向学心に燃えている様子ではあった。

「日本語能力の2級を取りたいです」

とテウさんは言った。

3級の試験には合格しているらしい。

そんなこんなで平日の夕方6時から1時間半程度、彼の日本語学習につきあう羽目になった。

さしあたって「日本語能力試験対策」というような本を仕入れて来て教材にする事にした。それだけの需要があるからといえばそれまでだが便利な世の中になったものではある。

テウさんに例文を音読してもらって間違いを直したり、例題を解いてもらったりしながら勉強を進めて行った。

教える立場になってみると常日頃、自然に書いたり読んだりしゃべったり聞いたりしている日本語というものは、なかなか手強くええかげんな言葉であるのが身にしみるのであった。

漢字一つにしても読み方が何通りもあるのは理不尽だし、動詞の類などは活用することでくるくと意味が変化してしまう。

それでも1回の勉強に500円だけもらうことにした。

往復32kmの道を通う以上燃料代くらいはもらっても良からうと考えたのと、お金を払う方が勉強する方もやる気が出るに違いないと思ったからだった。

無論のことだが教える方も例え500円でももらえるとなれば、多少のやる気は出るのであった。

その頃テウさんの給料がいくらあるのか？などということは一度も詮索しなかったが、とても気前のいい男で

「先生、コーヒー飲みましょう！」

と言って

「要らない、要らない」

と言うのに自動販売機のカップコーヒーをちよくちよくおごってくれたりもした。

テウさんの住んでいる所にも何度かお邪魔した。自動車の試験場の近くに2階建てのアパートがあって、その1階が彼らの会社

の寮というか宿舎であった。

2階にはフィリピン人の一家が引っ越して来たばかりで、ずいぶんにぎやかだった。養父市は田舎だとばかりに思っていたが何時の間にやら国際的な一画もあるではないか！と驚かされた。

入ると足の踏み場も無いような靴脱ぎ場所があって、簡単な炊事場があって四畳半の部屋にやたらと大きいテレビが2台あってこたつが置かれていて、その奥に寝室があった。

「大きいテレビだねえ」

と感心すると

「会社ケチだからテレビ見る、出来ないです」

という返事だった。どうやらビデオ専用受像機なのである。

山賊みたいな髭面のKという名の青年が居た。同僚というか上司というべきかよく分からないが炊事はすべてテウさんがしているという。

二人は静岡に本社のある会社から派遣されて来ている。名前だけは全世界に支店網がありそうな感じだが、実際は小さな会社であるらしい。

いくらテウさんが愛想の良い男だと言っても四六時中一緒ではストレスも貯まるに違いないと同情すると、部屋の隅に新潟の方の清酒が1ダースほど積んであるのが見えた。

本人「そんな酒飲みじゃありませんよ」と謙遜していたが、いかにも酒の似合いそうな風貌をしていた。

例年にも増して寒気の厳しい冬、ストーブも無いアパートで日本語を勉強するベトナム人と日本酒をたしなむ山賊みたいなのが長い夜を幾度も過ごすのであった。

2月が過ぎ3月に入った頃、勉強は順調だったがテウさんが一回500円の授業料をしばしば滞納するようになった。

聞くと給料がきちんと支払われていないらしい。

「僕の会社、おかしな会社です」

というのがこの頃の彼の口癖であった。

土日祝日は半日出勤だが毎日働いているのである。給料をもらえないということはなかろうにと思いつつ心配していると一週間ほどしてから

「おこづかい、もらいました」

と言って滞納していた分をまとめてくれるようになった。

困った会社だなとは思ったが「きちんと給料払わんか！」と怒鳴りこみに行くわけにもいかず、いやしくも市の施設の管理を任されているような会社がテウさんの言うような変な会社だとも思えないのであった。

今年の春は妙に寒い日が続いてなかなか咲かないでいた桜がようやくちらほら咲きかけた頃、とうとうテウさんが

「会社、来月で辞めること、決めました」

と言い出した。どうするのだ？と聞くと

「辞めたら仕事しない、日本語の勉強する、それもいいです」

という。ちなみに日本語能力試験は7月3日だった。

「住む所はどうするのですか？」

と重ねて訊ねると

「今の所、いても大丈夫、思います」

と甘いことを言うのであった。

テウさんは4月25日に社長に直談判するべく静岡へ出かけて行った。

帰ってきたテウさんの話によると、すでに3月末で解雇になっていたらしい。ひどい話もあればあるものではある。くびにされているとも知らず毎日6時すぎに起きて朝飯を作り相棒の日本人の弁当まで作ってやりながら土日にも休まず。しかも昨年からの未

払い賃金が130万円にもなるという。

「半分だけくれました」

と言って下手くそな字で手書きされた念書を見せてくれた。

そこには65万円だけ会社が支払う旨の事と今後一切テウさん側が苦情の申し立て、未払い分の請求はしない。との事が明記されていてテウさんのサインが記されていた。

人の道に外れているのではないか？

彼の話によると社長氏は「忙しいんだ、ごちゃごちゃ抜かさずさっさとサインしろっ！」というような対応だったという。

やがて五月の大型連休も過ぎた頃、

「今住んでるところ、住むこと駄目になりました」

と言ってきた。静岡から

「テウ出る！」

と言ってきたらしい。

「行く所がないなら僕の家に来たらいいですよ」

と先生としては言わねばならぬと思ったので、そうすることにした。幸い我が家はスペースだけは普通の2軒分はあるのである。

5月15日、日曜日の朝ワゴン車で迎えに行ったのだが、ふとんや扇風機や炊飯器、鍋に食器に着替えで満タンになってしまった。案外な大荷物であった。

我が家に連れて来る途中で近所の山を指差して

「あの山は1000mあります」

というと本気でびっくりするのであった。テウさんの故郷はハノイの近所の平野部なのである。

夕方は家の庭でBBQをしてテウさんの入居を祝ったのだが、その日の夜、彼にとって重大な事が判明した。

「先生、なぜ、ソフトバンク電話入らない？」

「山が高いからでしょう、あきらめてください」

「・・・」

やがてテウさんの為に片付けた彼の部屋から異様に長いため息が聞こえてきた。よほどショックだったらしい。

翌日、電波の入る所まで連れて行ってほしいというので、南に5 kmほど県道を走って小さな峠を越えてみた。

木の間からはるか200mほど下界の線路やら国道やらが見える。

テウさんはずいぶん長い間しゃべっていたが電話を切って

「お父さん、お母さん早く帰りなさい言います、だから日本語の試験もういいです。名古屋に友達いますから名古屋に行ってからベトナム帰ります」

と抜かしやがった。

さすがに腰が抜けるような気分ではあった。春になってから日本語学習の熱意はいまいちだったが、6000円も払っておいて不意にする事はないであろう。

念のために試験センターに返金を申し出たが「いったん納金した以上返金はいたしません」というがめつい返事だった。

その夜、テウさんがベトナム料理の「ホウ」といううどんみたいなものを作ってくれた。

待っている間にビールを呑んだのがたたって腹が破裂するかと思うほど食わされる羽目となった。腹八分目にして医者要らずとはよく言ったものではある。

せっかく作ってくれたのだからと思って食べたのだが、やたらと生っぽい野菜がスープの上に浮かんでいるのには閉口したものの米粉の麺がおいしかった。

「荷物は30kg以下でないとお金たくさんです」

とヘルスマーターで計りながら帰国荷物を深夜までかかって整理していた。

「服は先生にあげます、着て下さい」

と派手なセーターやらジャンパーをくれた。なるほどベトナムでは出番の無さそうな衣装だったが、もらってもなあ〜とも思った。

ちょうど週末に神戸で研修会や会議があったので、神戸まで車で送って行くことにした。

5月20日快晴。

お昼前に着いたので三ノ宮駅の北側にある「中卯」で牛丼とうどんセットを食べた。

ここでも気前のいいテウさんがおごってくれた。

交通費の代わりと思ったのかも知れない。

お店の前で握手をして別れることにした。

黒い大きなボストンバックと白い大きな買い物袋を持ってひょこひょこ横断歩道を渡って行くテウさんを見送りつつ彼の健闘を祈った。

ベトナムでも日本語能力試験を受けることは出来るそうで今回は12月だというのが、ベトナムに残してきた銀行員の彼女と年末に結婚する予定だという。

次回の試験はととても勉強どころではなからう。

そんなわけでテウさんを日本語能力試験2級に合格させるという計画は頓挫してしまった。

だがしかし、テウさん夫婦に会いにベトナムへ行くという新たな計画もありではある。

ありではあるが

「先立つ物が要るのだなあ〜何事も」

と人ごみにまぎれながら異様に長いため息をついた。

「プロジェクト：テウ」終り



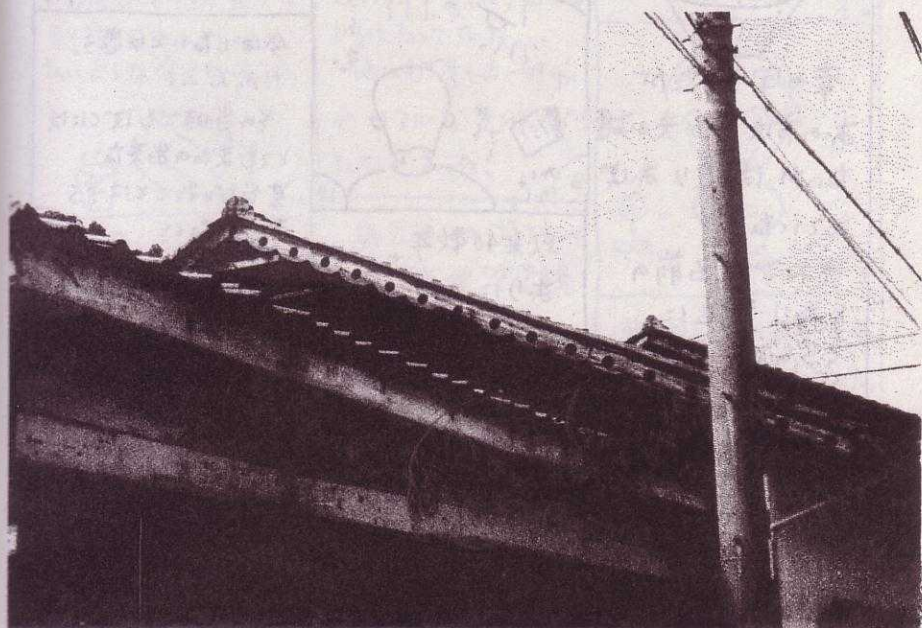
街かど  
ふらり  
みてある記

写真は旧生野鉱山の購買会の建物です。破風板に丸い穴が空いていてエプロンみたいな波型に切っています。あんまり効果は無かったと思いますが、愛される購買会を目指しておられたには違いありません。

今NHKの大河ドラマで豊臣時代をやっていますが、あの頃、生野銀山の銀の産出量たるや全国の83%を占めていたとか、太閤秀吉の栄華を支えていたのは但馬の生野銀山なのに全国的にも世界的にもあまり有名では無いのは何故でしょうか？

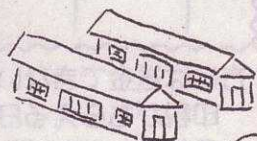
穴の空いた破風板をながめながら「知る人ぞ知る」の方が良いこともあるかも？とも思いました。

(朝来市生野町にて)



ひるめし放浪記

ゆきちゃんの巻



近所に教員住宅という  
建物があった。もっとも  
今でもあるが今は隣保  
の集会所になっている

2



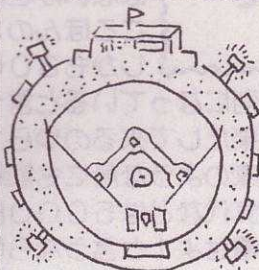
3

昔、同級生の古川ゆきあ  
くん一家が住んでいた。  
お父さんが先生だった  
ので教員住宅に  
住んでいたのだった。  
お父さんもいたので  
4人家族だった。

4

彼の家に遊びに  
行くときめずしい  
おもちゃがたくさん  
あったものだ

5



野球ゲームがあって  
小さな人形がボール  
を打ったり走ったり出来る  
ようになっていた。  
他にもサッカーゲーム  
やリアルなサンダーバード  
などがあつた。

6

お父さんの持つも  
のが天体望遠鏡  
があるのは  
びっくりした。



7



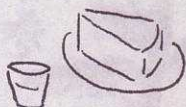
8

おかあさんがまた  
ハイカラなというか  
近所にいるおばちゃん  
連中とは一線を  
かくす人であつた

9

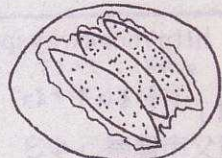
行くとき必ずおやつ  
を出して下さつた。

しかもその頃家では  
到府口にしたことな  
いような食べものであつた



10

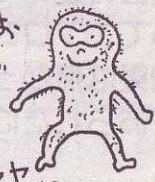
ある日、ねばねば  
した甘いものがかつた



さつま芋が出てきた。  
たすねると  
"大学いも"  
だという

11

名前が  
ゆきお  
なので  
よく  
ヒマヤに  
住むという  
雪男と  
呼んでいた  
こともある



(20)

ゆきおのゆきは  
はっきり

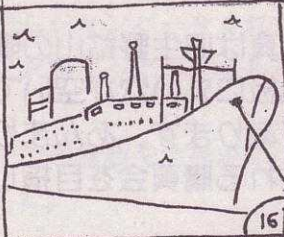


幸の字だったが、  
おの方は男か夫か雄  
なのかはっきりおぼ  
えていない。

それでも名前  
のとおり幸せに  
くらしているに  
ちがいないと  
思う今日この頃  
なので。

ちゃん  
ちゃん

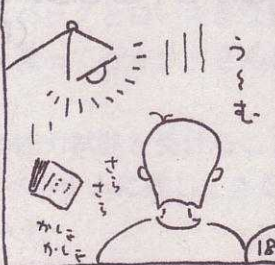
END



16

舞鶴へ行ったらしい  
と聞いたが、子供の  
ことゆえ住所も何も  
聞かずじまいで  
さよならし  
ました。

17



18

以来40数年。  
おりにふれて思い  
出すこともある。  
もし彼があのまま  
近所にいてくれたら  
ぼくの人牛ももう  
少しましなもの  
だったかも知れない

19

さすがに先生の家  
は食べ物からして  
かしいことはないか  
と子供心に思った。

12

ゆきちゃんは勉強も出来  
るがひょうきんなことも  
出来る少年だった

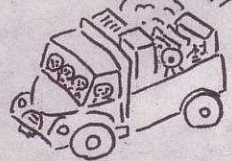


13

今はしないとは思  
たぶん...  
その当時でもぼくには  
とてもまねの出来ない  
芸当だったことは言う  
までもない

14

小学2年のころ  
古川先生一家は



引越しました

15



先日印刷会社から電話がありましてなんと電子書籍で僕の本を買って下さった方がいるので印税が出来ました!とのことでした。

印税がもらえるなんて夢のようではないかと思いましたが、現在のところほんの300円なのだそうで、しかも3000円にならないと僕の

方には送金できない規則になっていると言うではありませんか。

印税がもらえる日は果たして来るのやら?

それはともかく僕の家のような所にも節電要請のチラシが関電から来ました。先月の電気代などは5000円で済ませているのですが、これでなおかつ節電せよ!と言うならばいっそブレーカーから下ろすより仕方がなかろう?と思案しました。

閑話休題、今回は気の毒なベトナム人の話を書かせて頂きました。本人ひどいめにあっているくせに「悪い会社、仕方ないです」と言ってあっさり帰って行きました。日本の社会や日本人によっぽど嫌気がさしていたのかも知れません。

話は変わりますが7月の末にまたもや東北ボランティアに行くことになってしまいました。

誘われるとなかなか嫌と言えない性別ばかりは仕方の無いことです。

しかしユッケ騒動に続いて今度はセシウム汚染とは牛の受難が続きます。やれやれ。

編集・発行「なかよしひまじんジャーナル社」

村上隆司 〒667-0142 養父市建屋543

TEL 090-5090-2469

himajakeitai@docomo.ne.jp

郵便振替 01170-3-38121

購読料： 年間 1000円 ( 隔月、年間6冊発行 )



<http://bookway.jp>

のサイトで見えます。

印刷本は村とま